



15
508
2

管子地員篇之二

○朱子曰春秋之辭命猶是說道理及戰國之談說

只是說利害語類四十四

而之とさう申遠きこと世にきて人心正しく成
ふこと其流風建ちて礼問と道理不違ふ事を
知らざる人其義の者も所を知り戰國の
久しき小むて人必は荒れ終へる理を知り
外一なるを聞きて必は利害と云ふの利
を思ひ利を以て人豈義を知らんや

○管仲春秋乃以仁在りて霸道と做得武後季漢に



樂戸と名付けて使令に聽せしめたる都會の
地と不遊女子百を以て中一窮婦僻邑ととも在り
壹色此女ありしありし一書に及
多う我回今日の時も京師東都乃いありの都會津
歌イロハ花柳の業とありあり其代點茶逐客の戸宿堂
宿瀾マシの類私科小姑の徒ども亦幾シ子百人や物ども
官其利を覓て征徴せしめたりハちまの喉智とあり
愚やぬく老もも弱も彼惑いの止るる新貴カカレ愛備ヒウの
あは入るるも眩メカシ射と多し名とさし一命を喪す人

古今又多し一猶梨園の少年ウツ娼妓と業を争い市閑トリシメ乃
飄客カクと稱し色と售れ者亦都鄙又流俗せり世人
是等シに親シカシましれぬ家より移妾とまき淫戯馬クダケル一又
甚志と喪ぬ輩少ありとありありとありハ人のあま
入て世通一ありして刑はらわ世のそれとありあり
ゆるりや

○九傳曰既定ヤシチン尔率ニシヨウ諸蓋シラ飯サ吾カク又カク殿ン
艾殿イノコとハ壯取と率て淳とありありとありと云ク方言に
燕朝イノコの事これを殿と偶閑東にあられと疏シと呼ぬ

昔も八重山嶼を打て人のりよ中とて

民を此名好はとて其をなくよめりよはひ。山吹
くしよ民も民のやしうもて 豊原のゆが

ありやうと海の方をよみて又やうき山吹のてれ

。阿蘭陀の浮泥蘭吹七列の一名 歌羅巴 我國より西北にして

海上二百二十九百餘里

七列ハセイラントクルウ子ケウイタラキト
ウルトラトウナンイセルフリーヌラントララタ

北極地とちり事 五十七度は事を終りにて風をわらこ

我船に多ううとて海七列に商長に主ありて国とら

たしてふいにいさふとあは高船と名をいふ

商長をいふ
コシハシマトはア

本國格とて遠きり故 吶哇の一語 咬喉也 アラハカ ジヤガタラトモ と云所と

遠城也と名せり 我俗にふ
代なる

我俗にふ
代なる

と云高船と名をいふ

昔船の令とてしむ年くけりて營運既高の化物を較勘

十一年より一かふふに名共右月勘驗と通とや故國

人 ヨミラツク 巧にして凡是付の利他列の及ふふありて寶船殊に

大に豊國なりとも亦此に物と名をいふ風俗を尋ね

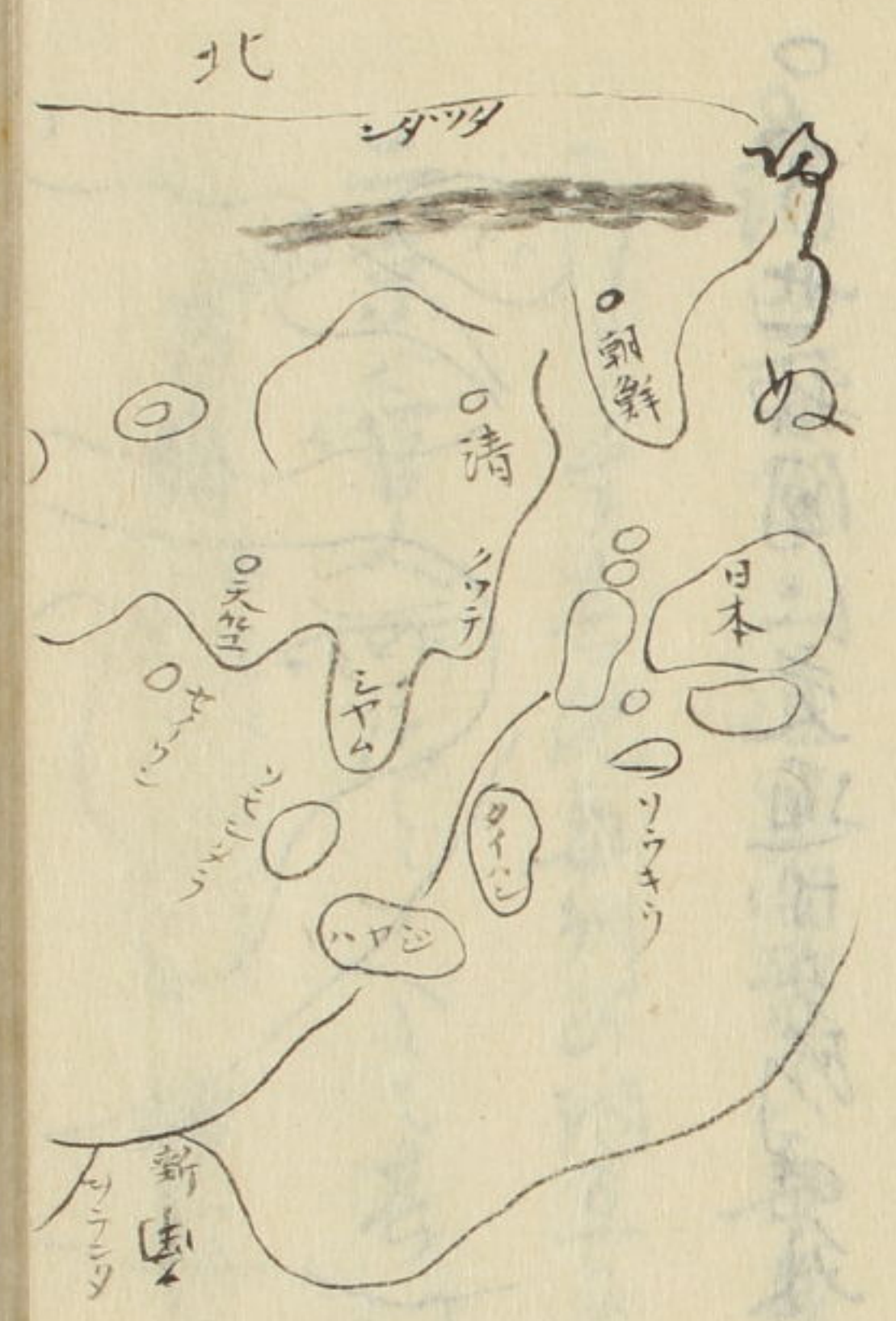
又より天文地理と名を醫術よりいふとて善道にこまや

ひうと名を年より名をよみてて其教をいつとて三月紙

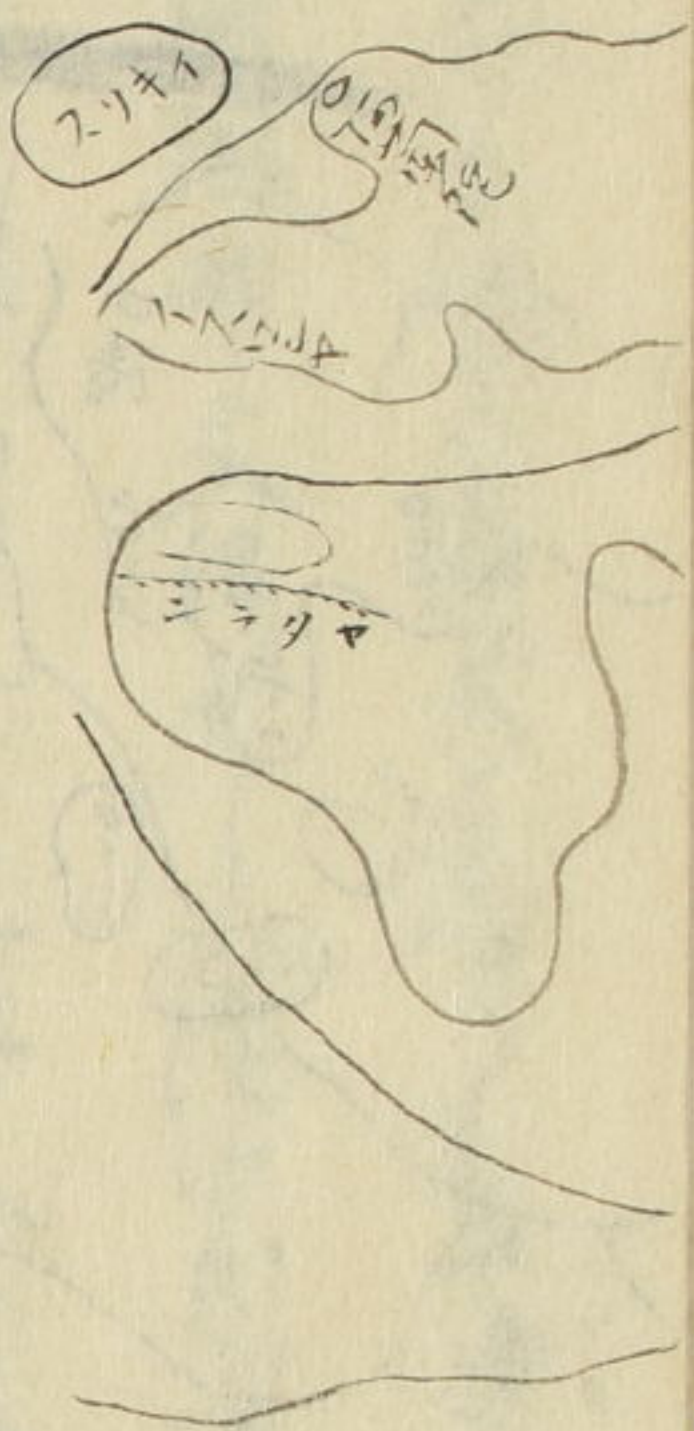
柳管にやうて故主辰ことし 海をサリ海島嶼國の形取也

てもけり海を渡りてあはれとてその後多し
 彼国我々の入候せしは後田氏の深界より記とて
先に予記 肥利
 平言にありし宛永十八年以降は海港小入候とされハ
ジャリ 肥利
 あり紅夷ともお月のお風にも備とて七月の由長崎小
 入て交番し三月を二年も賣のナビタこと南年此
ゴト 代て九月までと限り飯帆せり九年の如きもつ
 ち聲ハ殊玉印帛に記し御 東極定用字 牧奉に違
くハハく色高 ち記し
たに及く 向之遠く
 向之遠く
 向之遠く

何と道より人なりしは波同調以長
 てありし後有司ありて民と令し礼とて
 今日まで交通れ業ありて生と逆ゆハ又海
 昔天氏乃氏く長懐氏の民ありしは
 人の人歎息し



オートル 下司也 アフロリアン
 オパビタシ 司也
 オメストル 醫也



○今世我國に交通する所の外國琉球の層と交臣稱し朝鮮の
 毎に隣好と備わ紅夷ハ飾多と入て甯南叛せり大宛交趾東
 京乃ハ天竺の内にして古城東埔察太泥六甲暹羅羅也
 牛滿刺加等の諸國より來て船高せり彼莫卧赤の如きハ
 南天竺才一の大國暹羅廣ハ同洲の初め地にして佛跡
 残りしつとつや今我ハ交通するのハ皆國字檢行に書す

但し北の方外夷此中にて回回の如き多し中国に通せり
 改漢字と用ゆされハ萬國の詞ハ音訓にして文字に心あり只
 音との用ゆ天竺ハ一字多義と合とて唐の如く韻津少
 謂詞にハ非も亞媽港呂宋諸危利亞等の國ハ耶蘇契利
 斯當あつれハ林ありて其人を入したまひ給
 ○清の二言ハ三道の商賈ハ毎年我に入津す其國南京の詞と以
 して其其他毎列の詞互ハ異ありて相通せざるあり
 二京ハ官人の居とて其詞等ハ又たとハ

白糖 南京ベウクンと云
北京ハイトンと云 此れを以てとす

南京と外列との遠ハ

文趾

南京キヤウウ
漳州カウテウ

廣南

南京クヒナム
漳州カニナウ

此類多ク

○海潮凡干満遲速土地によりて新しきもの申異邦の書

間々見ゆ土雜組

我國にてても亦如く同く申を以ては揚子江

今スル

西備後北白石ノ海りま凡五十里其らの潮波も上へ

こゝ満ち又々周防のさし小至りて早余里の海上潮止ると

ありしやとてけし自此故不の山上のしきりま早余里潮止へ

海平より以西北亦のりし乃ん早余里又上へ満其間ハ

亦し等し申れども又長門のりら何れも潮止のちへ

舟軍と後者湖汐の考へるとや

舟軍と後者湖汐の考へるとや
きこゆから改きてやあるゆ

○或人同様樂に徳ハ定利の方ある時好しとてしつる曰今

しとて其意を叙別定りしとありし様樂が古よりあり

源氏物語は様樂とて二傳院の所時とありてありしとあり

凡そ又源氏物語に之男より樂遊とて三人ありしとあり

様樂長者は浦ノ海に事又古記に凡そ樂遊が男

久松久継久中も昔は様樂の也ありし由公定分脈圖

有り

後頼ハ字多治也敦實親王の男凡大臣
源重信の玄孫伊勢守後重乃子ナリ

又同云云

室所ぬ心福有山遠志の四尊信堂に入るとハとあり

尾脚人形等を造りてこれを神とす。且つ一山を宮とあり此の

人等を勤て後衆徒れ自ら入申す。寺僧一代一度々、其勢と信す。

我誓田四月八日花乃其年の以人盤上の觀乃い神

人の食と云て座位と爲る者これに似たり但一八幡と

乃花の以ハ年中の供花に起り我誓田の花の以ハ灌佛

寺也其紐ハ同一カクも似りや

乙清水此所神樂ハ仲春仲冬ノ上卯。勅一々官人と差し

伶人系向一々求子大比礼此歌係糸等地の部もも最を以

少中一々。弘社め社にゆりあつての。二月十日ハ。伊國志

此法書回二回等の御事とす。上音密居此ハ八幡山下乃

比人等はす。是又つり。八月あ日の政生念式迎世

所再真ありて古へかり。今科一千石石津の。朝家宗

廟此所神々々々殊り。源此此所氏社あり。るま一々

沖光云下り輝りて海三門けり。氏草是しと述り。い

いといろ神此靈徳あり。言れ葉りくけて。其名とす。

野俗此歌り。

あまのさしをうりてをうりて。孫を子にたれ。これ

ましまし。い。これ。某此里にして。麻。果と

アヤツカニ

せーゆらうー馬倍り

或ハ曰クヤンデシテハ鉦大鼓の声なりとも子い念んあハ夕

くとも稱すりも勿子母と云ひいれぬと云ひれ倍後を

或人曰勢江以西の農又水田を耕ハハ西粵を心す我尾別の民ハ

皆鉄と刃也されハ牛耕ハ一人半日此契粟田一段と云と魚

漁を心す者之ハ小尚れりたとい牛と飼費ありて民

カと者利せん所ハ風俗い上ハ多し其ハ漁を心す者なり

曰予これと聞て農者たより種取れすも其なりと云ん

夫代々壞極りて泥土湿りて學園此地ハ稻年と云いあり

耕して是より深ク耕ハ行て勢江等の田多ハ其之氣厚に

於り我ハ尾南嶺に乃い知多りて種年と云と其あり

是日井郡山牧以北亦地多ク山と云又種耕せん種

耕ハ僅に土壤寸餘を完鏡面ハ淋の切實に運一とも

字斗の地と務す尾濃等のや、衍波の田ハ深く耕た

りてハ稲苗を根と云と云と蓋一平養潤澤の田ハいて

各洞ともて木稠目強種也これ其根ぬきりぬ也

彼嶺薄乃地ハ少し雨をぬれハ稲秧すあり種結せり其土

地の硬軟は種異りて其民不同今仕はぬ人ハ民家の

此勤農業此ありしを云ふ者多し此時より高貴と
滂て而人民事に心とをたしめし事を記す
次々其代ありしを改る民よまた其輩と云ふを
ありしなり

○遠江國秋山山物カを祀の地化して前下地守景隆
親王の軍 宗良 大令旨と奉一延えの地よりたてことり
乾興山等の兵と後王代軍を勤し其男毎歳守景野雲
子民知少勝遠幹乃い其嫡對馬守遠自にりてい地と

遠幹以東六宗良此所子
主維せ 時 遠幹を牛馬と万有河を
尹良親王の幕下なり

後高僧の行号と傳ふ卯月 壬辰 八日と云ふは彼山の
依驗者 快事院 にあいゆえ其地の旧壙依驗と傳ふなり

五のりしと云ふ永二年のころにふれと物名の古きはく
又ハく思義世にめいりくもありしと云ふを事記し
子なり者小知也東に七取く傳てたし書わしり
家業青纏 刑部大物守和 一肩筵にありしと云ふ今ハ傳ふ
たしなりせしと神夢後みりし山に納てり民族の
志と述くも其家の取と人傳ふしと依驗に授け傳ふ

惑いよ余と一なる馬安と年と同一して諸に及ぶ也

樂色好み者必窮樂窮樂者乱之所由也 周宣善 此語

為年色者樂のこゑに止し色と始り乾坤の

正徳周雅乃有別大婚の礼又何事と聖人人倫の道を

重し其始と一たまふ苟も閨門慎すく一

惑情に任せはめて禽獸に随せし甚とをれ多し

○謝肇淛曰今近世一鑲以上使執而回之貪官若女且

千方相載以飯而人不知也故懼法者皆愚民而犯法

者皆君子也 フキヤウヤクシ 嗚呼一鑲と以て盗人也故吏これと執り

一政と盜下と欺て利と盜ハ盜人なり盗ははとも免じ且

用いらる何名貪官朝子満りは盜林さるる一中人

朝廷として唐文宗曰河北乃賊と云るは易く朝

中の明堂と云る事ハ一又小人の君を以て行きて

義と云ふは秘中にて之を収いとすう親として己と

利し又其地を代己に背す己カ地と好身之事と為す

賂と厚して文と賂トありは賂を濫て好と親ト

の黨と用くありて之君と欺り誰一威炎と云トて

外臣と忌り一利個を張て下民と濫るれ大盜の術

冬内寺一僧毎の中し近世ハ車いそるありしとて
驕りたる者信しといひくありきしゆりし其僧
俗のよりんありしゆり増す聖れやりに利を願ひ其
師とて諫し及人々世よは問も信しゆりし

○信列松代 古谷ハ 河中嶋 へり一僧之甚布子法水とて古跡を思ふ

ゆりゆりしとて舞巻造りて書置の像ハ千年正觀音

虚空を 千年ハ三又中三福とて 坂上田原又大同元年乃建之

とてゆりゆりしとて大乃大乃八尺の四天と安きゆりし

とてゆりゆりしとて勝地とて免ぬ武田家又維の後表

家の修りゆりゆり天正ノ項上徳分忠輝主所領とてゆりし
修理せしゆりゆり其後参議忠昌卿の有きゆり酒井忠勝の
采地ゆりゆりしとてゆりゆりゆり今ハ白出の依
りゆりゆりし

○をこの國云竟川ノ西やえ川下に弘院寺とて業師とて密
院ありゆりゆり龍の前とてゆりゆりゆりゆり 先年江上ハ
持せしとて
龍の故事ゆりゆり天竜川の秘とて龍とて起りゆり
とて系師建仁寺小鬼の前とて凡一尺中の髑髏ゆり
是ハ巾縁とてゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

地うんと秘をたはぬい一所のありけす。事なす他。
乃のゆゑ白河を可いなるんやと深田晋南老人が感一
こまゝ一女任の所基和後とゆふ納まりとあはせし
む魚くくしあや

○張文喜、新家宝要三卷 唐照甲辰の序り 朱子小学の末流にも備す

老幼凡そ有るの考考古の士毎に読むを書なり予家
礼儀節と講むる時ふそとゆて人々日の流習と辨ゆ
浦嶋子水府に至り一故事万葉集の歌ありて云書 并記
一本朝神仙傳に載たり丹後風土記に云るよむを

丹後國與謝郡日量里筒川村の人早部首等、先祖筒川與
子トシマ

其歌子表頭能齋能宇良志麻能古々水江浦嶋子なり
子等に志朝と云ふ我と云ふ常世の瀆れ浪の音と云ふと
溪ト凡そ浦嶋乃子彌と云ふ事なり云々三百年餘歳に既
る神比はる浦嶋子に比而を彫過百年の明ら申は土
記より多し予梅子より彼火を物見尊我故りに似たり
物事乃古傳に云へ偽歌よすたり申す存にや
○一事主神雄略帝より又一たよなるゆゑと帝有れ流り之伝凡

土記より曆傳と引て之を考へて古事記の流しを按ず
に高野天皇宝字八年高野宮敷内田守等と氏神なる
を考へて高野山の東に在る高野宮敷内田守等と氏神なる
其の祠と依國土依郡に坐高野宮敷内田守等と氏神なる
大和國葛上郡葛木座一言主神社と式部裁せり後
小角以神と傳へり後を慮也倭歌名橋とあり
イウの伝は流しゆりゆり

○神代卷に不平の二字とガガサとタフト訓せり不豫の意と
のし流し一宿園のものと云ふ此記に不豫水土弗潤の字

としやてこしタマヒヤクサミタフト点せり履中記息父病
不安のゆなり

○或人問我問曰一神はを所々に立て多々いふらり
系廟別制に依りて此れの新字に依りて各者姓祖は
神と宗め此は家別支家を尊しと母貴と他所よ
賜いて近き位を以て勅命を授て氏神此社を此に
立早令これ此れなりと云ふ

大和國平群郡平郡坐と紀氏神社
是木荒宿稱の本廟にして記の宗家其祀を奉と

伊勢國貞辨郡平群ノ神社

是日社として名高事ハ三代実成ノ大内記中酒ノ前
文雄歎云ク木菟宿禰之後味酒臣の姓を賜ひ伊勢國より
被貫と云故其木曾の地に上祖代社と名高此れ延喜
後世我々の身に出り其の祖神のしるしを具す勅命
なりとてしるし乃祈りなるといひ此れ社と遷して祠と云
はハ實水祀新をとりてあり
樽節此二字とホドリハカト読曲祀樽節の注ハ樽載柳
也と云ふはたはた

○温石或人同本草に古き磚と燒し身を温くするなり又證
類本草に石を燒くを煖用ゆと温石と云ふの別は温石と
云石有るは非らず由之て死なせは温石を青色と帶る
石と殊なり温石と云ふは何と曰山雲通志ハ板縣とて所
出る石に色白と兼潤熾玉れとてわらわと温石と云ふ
是れ我國より温石と云へされハ冬日風烈しき時ハ石
此後多折し安し物多と云ふは事あり指をたけて強と
云ふは事あり教なり也夏月の時石は冷し是れ温石
は性あるものなり他の石に比べたりこれハ證類の

浮雲とほいそく物よの月とめと後々歴代此
 平家物語の化者説と有公定の分脈圖に尤多門權後承盛
 隆地男民部少輔時長平家物語化者説也と記せしり也ハ
 撰者三人ノ多クとも又その多ク異流別本多キなり
 中臣板の詞ヲコトトシイワテ多ク多ク之ヲ家ノ解多ク
 梅より日本紀ヲ三韓のゆと云々天地割判之代カキコトトヒ草木言語
 之時と對し書を我日本此中と明しにして後々此を益々
 尤當田乃解しなすにや凡そ信流此時草記之倫序冥鼎乃
 此と我國性昔の法コトハサ又根本コトハサも言同し一昔と道あり

不致なり申實として流ハ非た海にや

- 日本紀の文八十九卷種我々言之
- 異邦此書に我帝宮の事と記せし中世以来此制を見て
 信流はくしりありとある性良内裡の殿堂堂並にありに
 恥食も又昔アハカシ信流代時しりしにや日本紀ニニニ小銀田コガネノ
 宮廟と造起し尾霞オシロイにせん事を擬しありありとあり
 今の尤大臣家九條此所を我公御造進正徳改元ありし
 今中内室ウチナカ化ししありし何なり制はやく云人あり予之
 此れを道家ノ傳傳内室といふ井なく居裏れ内不造る

半くして 世系表致法流致ししうらむら作也とや

凡法ちの金さくししと内室作りの法とツア
初巻の神宮るしこれなり
館堂を日本紀（巻四）にムロト

訓せー室の字とのしむらと読に二限らふら

○ハラカラ

旧事宣化記は同母才と書せハラカライト訓せり 胸版の

芽ト云事也 （版イ）これぞカレカラ 然ハハ母母父とハラカラト

○ハナカト

○古佛像よりの作て希有此種と云々梅々（三十一）日本記

に轉作身為造佛之工ト云 推古天皇の御宇ノ人なればいすれ

ひゆ化佛なり

（城東建中寺ノ石ノ三身の印の阿） 是等の化

云云 實に絶世の古像と云はし

○西人云凡そ死者其靈に水も向ふハ佛法（イ）を效るる事梅々

是れ我國上久其俗飲日知化（イ）に 麴臣（イ）が死せし時影媛哀傷

の海歌と傳へし 麴（イ）が 飯盛玉（イ）椀に水盛（イ）かといひ甚死（イ）乃

河水（イ）飲（イ）とて酒（イ）の河ありこれ我國佛法見らるる所以

は氏ト云も餓鬼の外に菩薩多し水も向ふ事今

俗ハ我祖先の言と承へり 餓鬼として其去り

思えざるの事 亦水もや 釈子云凡そ餓鬼ハ住

いそはすしゆりさきしきいしとや

○或人云古き鐵炮の切に千里切と云ふは昔は江千里

伊予守

後五位下

久しにわにいと頃日主辰 誰故人物下にも古き鐵炮を

長く買求て遣二人は送らぬほどの切と云ふは目にいし

とやゆゆの富人奇を街ひて裸北日にし一茶忘れ体をも

丁あぐら

○癘醫

外科の探札 抽籤也今の観音籤

白梅

墨也

輕策

扇也

便面障面と云ふ

鎗旗茶也

聖液

酒也

梯脚

後よりふりかき

烏麥

蕎麥也

○詩は首如飛蓬と云ふとありこれと云ふは飛蓬草子

と云ふはなでしこのこくは野菊のひらうらぶあしを實は

好に如きとなりて花散らゆふ多きよき之

騰吹山其麓春照と云ふ里にて氏家もなすやう古家

海をいふ如くと云うし也国日光山の下標地原の艾と

よしと云ふ古家なりや

○五月廿日一雨種をを新の異邦の書

我國百葉しつる世人多知と云ふ昔より葉はひらと云ふ

に感へて況や四海を掌にせしり一人を兼道冠を昭明三
 光弟子南嶽上真人と十五字の号と玄宗の自稱也 會昌牧龍
 梅もく小玉京金闕七宝元臺紫微上宮靈寶至真玉土辰州白王
 天道君といふや宋の徽宗に群臣へはどし奉りし尊号
二十二字の中玉と字と
二字つてまじり 徽宗又上章青詞の自稱は奉行玉清神霄
 保仙元上陽三五瓊幾七九飛九大法師都天教主といふは
 下れしりや數量文宗多う名古今にめしとなくやはるそ
 峯道士高冠れそに遊ひしと貪り死を懼りて虚誕の務
 祠枉惑れ兒戲に似たりや壽福の命もり豈祈てこれといふ

やきしりくか唐宋れ愚主の吟

○夏日和峯上人亦上綺筵一律

獨避 _ラ 夏畦 _ラ 忘 _ル 去就 _ヲ	月幽風淡一茅亭
團々 _ク 荷露 _ヲ 投 _テ 珠 _ノ 潔 _ク	冉冉 _ク 松烟 _ヲ 捲 _テ 翠 _ノ 頰 _ヲ
夜笛 _ヲ 覺 _ル 孤林 _ノ 睡 _ノ 鳥 _ノ	破窓 _ヲ 伴 _テ 教 _ノ 魚 _ノ 飛 _ノ 雲 _ノ
梅霖 _ヲ 洗 _テ 晚 _ノ 雲 _ノ 山 _ノ 緑 _ク	河澗 _ノ 不 _レ 淺 _ク 億 _ノ 梵 _ノ 聲 _ノ 評 _ク

○国乃松河ありて真杉山マキヤマ鑿ウツ国 槻根生山イキネノナミ背国此類イナ昔材木と

榊サカキ一山あり一坂の程也山ヤマ西国貴船神社キフネノヤ屋敷

久々の知此神と多オホシ是コノ樹木此靈ツキノミにして材木と榊サカキ山ヤマ

本乃本此沙社也或人曰イハレ山ヤマのノ木生嶺キノミにして佳木ヨシキ盤生

と山嶺ヤマノと云イハレ申マツルなりナリ了マツル也ナリ魚イサもモいイやヤ そく船の字にけんむ

○山城国水原ミヅハラ近チカ杉井里スギイ八葉羽林楠ハツエハヤ正成朝臣マサナ楠ノ木キ倉クラへ

下シタらシとシ一ヒト時トキをヲ子コ西ニ行キと教訓オシエして里サトにニ故郷コトウチにニ歸カエるル

人ヒト傳ツタへルるル為タメ行キのノ教オシエとシ耶ヤ蘇ソ此コノ碑イサナりリ

以モれテ海ウミにニ流ナるル為タメ八ハツ葉エハりリ礼レうウるル也ナリ杉井里スギイ

集ツクにニ之ノをヲ春ハルめルりリとシてシ竹タケ水ミヅありリ乃ナリ

よヨ久ク保ホすスとシてシ魚イサ一ヒトにニ如トシくクにニ得エるル也ナリ

歌ウタ人ヒト乃ナリ南ミナミにニよヨすスとシてシ一ヒトにニ今イマをヲなナれル也ナリ

集ツクりリなナるル也ナリとシてシ魚イサ一ヒトにニ今イマをヲなナれル也ナリ

集ツクりリなナるル也ナリとシてシ魚イサ一ヒトにニ今イマをヲなナれル也ナリ

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. It appears to be a list or a series of entries, possibly related to a collection or inventory. The script is dense and difficult to decipher without specialized knowledge of the language or dialect used.

